

仏師円勢——円派仏師研究（二）——

武笠 朗

はじめに

前稿「仏師長勢」¹の冒頭で、「円派」「院派」「慶派」「奈良仏師」「三派仏師」など今一般的に使われている仏師系譜に関する用語が、昭和八年の奈良帝室博物館における鎌倉彫刻展を契機に登場したらしいことを述べた。まずはその補足から始めたい。これらの用語は主に鎌倉時代の仏師に対して用いられ始めたが、なかなか一般化はしなかったようである。昭和十六年の『日本美術大系 彫刻』²（以下「大系」という）の「七 彫刻作家伝及系譜」（小林剛執筆）では、鎌倉時代の仏師について「慶派仏師（七条仏所）」「院派仏師（七条大宮仏所、六条萬里小路仏所）」「円派仏師（三条仏所）」と分類するが、藤原時代後期の仏師に対してはこれを用いず、「正統仏師」と一括する。同書「二 仏像彫刻」の「六 鎌倉時代」（吉田長善）では用いられるが、「五 藤原時代後期」（澁江二郎）、「一 総説」（小林剛）では使われていない。ただ、同書「八 彫刻用語解説」（大口理夫執筆）では「院派」「円派」「慶派」が立項されている。ちなみに「円派えんぱ」は、「三条仏所はその祖長勢に次ぐ円勢以下の仏師名に円字を付するを以て俗に之を円派という」とある。三条仏所の俗称であるとの認識である。

これが、特に平安後期のいわゆる正系仏師としての三派仏師に対して使われ、仏所名に変わる時代を超えての系譜呼称となるのはかなり後のことであった。³昭和四十年代になって「藤原彫刻」様式論が活性化し、藤原時代の仏師に対する認識が徐々に深まって行ったことと歩みを一にするらしい。昭和四十四年の西川新次「藤原彫刻」⁴では用いられていないが、翌四十五年の中野玄三「藤原彫刻」⁵では、「慶派」「院派」「円派」「奈良仏師」が使われ、最近ではこう呼ぶことが多いとされる。このあたりが、平安後期の正系仏師についても使用する初期例かとみられる。先の『大系』用語解説に、「仏師名に円字を付するを以て」とする円派最初の仏師として名が出るのが、本稿の主人公円勢である。

仏師円勢の研究は、谷信一の「円勢法印考」⁶を嚆矢とするが、この昭和九年（一九三四）刊行の論考が、ほぼ唯一の円勢専論として未だにその意義を失っていない。谷論考は、その副題の通り、彫刻作家研究としての「歴世木仏師研究の一節として」⁷、昭和六年の田中豊蔵の「仏師定朝」に啓発され、その後を追うべく執筆されたものであった。ここで谷は、序論的に藤原時代の仏師について述べた上で、「円勢法印伝」を記述する。仏師の事績研究の緒を開いたものとして意義深い論考といえる。

この時点で円勢の遺作は知られておらず、谷自身が言うように「記録上の一人物を描出するに留まる」が、それから半世紀後の昭和六十二年（一九八七）に伊東史朗氏が仁和寺旧北院本尊薬師如来坐像（図）を、円勢と長円の合作として紹介し、ここに円勢はその遺作を得ることとなった。伊東氏は、円勢と長円の事績年表を掲出した上で、仁和寺像を、合作ではあるが円勢指導下の作業で、円勢の作風がそこに反映しているとされた。仁和寺像には、定朝様の直接的影響は少なく、康尚時代の様式の投影があり、それが円勢の作風だとされたのは、記録上からも定朝様の踏襲仏師と想像されていた円勢の様式観に新たな見方を提示することとなった。

本稿では、前稿長勢の場合と同じく、彼の事績の整理検討を行ない、発願主や願意にも注目し彼の造像環境全体を明らかにすることを目指す。後掲の資料「仏師円勢事績年譜」を御参照いただきたい。長勢の論考ですでに触れたことも、円勢事績として再述する。彼の作品については別稿で論じることとしたい。

一、出自と生没年

円勢は「円成」「円清」とも記され¹¹、一般に長勢の二男とされる。治承兵火後の興福寺復興造像を伝える『養和元年記』には、「金堂大仏師法眼明円」の割注として「長勢二男円勢」と記す。後代の史料だが、この期正系仏師の所説として伝えられるもので信憑性は高いといえよう。『水左記』によれば、承暦元年（一〇七七）に「法眼長勢二男」が源後房の二尺薬師を造始し（後述する）、「仏師長勢一男」が三尺大威徳像を作ったことが知られる。また同年十二月の法勝寺供養に際して、長勢と

ともに「長勢弟子」とされる兼慶が法橋に叙され（『承暦元年十二月法勝寺金堂供養記』他）、降って永保三年（一〇八三）の法勝寺御塔供養に際して、長勢は造仏賞を円勢に譲って法橋とした（『三僧記類聚』所収「法勝寺金堂御仏」）。長勢に一男二男がおり、長勢の弟子二人が上記の順に僧綱位を得たとすれば、一男が兼慶、二男が円勢の可能性が高からう。『養和元年記』の記載は信ずべきものと思われる。

ただ、兼慶についてはいささか不審である。法勝寺供養の際に「恵慶」とも記される兼慶（？）一〇七七〜一一二一〜一一三〇？）は、承暦元年に法橋に叙されて以後、保安二年（一一二二）まで『僧綱補任』に法橋として名が出る。『僧綱補任』巻四裏書には、「律師兼慶」として承暦元年十二月十二日に法勝寺造仏賞での法橋叙任が伝えられ、「長勢子」とある。寛治五年（一〇九二）に長勢が亡くなって以後、一時兼慶は僧綱仏師の筆頭に位置するが、嘉保三年（一〇九六）に法橋院助と席次が逆転し、康和四年（一一〇二）には、前年法眼に昇叙した円勢にも抜かれ席次三位に下がり、そのまま保安二年までその名がある。この間事績は全く知られない。大治五年（一一三〇）に「法橋。可尋死日。」と彰考館本『僧綱補任』に出るのが兼慶のこととすれば、その活動期間は五十三年間にも及ぶことになる。法橋院助との席次の逆転にいかなる理由があったのだろうか。また一男兼慶と二男円勢のこの差は何なのだろうか。兼慶は一体何者か、あるいは兼慶に一体何が起きたのか、興味深いところである。

円勢は、『僧綱補任』により長承三年（一一三四）閏十二月二十一日没と知られる。先述の承暦元年（一〇七七）の「法眼長勢二男」が円勢ならば、それが最初の事績となり、その活動期間は五十八年間の長きに及ぶ。初仕事が二十歳と仮にすれば、康平元年（一〇五八）生まれで、

八十歳近くまで生きたことになる。師長勢は八十二歳まで生きたが、円勢も同様に当時としてはかなりの長命であったかとみられる。

二、長勢のもとで

円勢は、長勢の「勢」字を継いでいる以上、二男でありながらその正嫡、正統的な後継であったと考えざるをえないだろう。一男兼慶との違いが何かは不明だが、兼慶の院助や円勢との席次の逆転は、あるいはそうした出自の違いにあったのかも知れない。その師長勢は寛治五年（一〇九一）十一月九日に亡くなった。まずは長勢のもとでの円勢をみよう。

承暦元年（一〇七七）八月十三日、「法眼長勢二男」と注される「仏師□」は、源俊房の二尺薬師を造始した（『水左記』）。『水左記』によれば、この頃疱瘡赤痢流行し俊房自身も罹患したが、この疾疫平癒関連の造像とみられる。「中堂旧柱」を以て作らせたとあり、「中堂」が叡山根本中堂のことなら、その本尊に擬した造像とみなせよう。時に源俊房は権大納言、父師房を後継した直後で、関白師実に使えていた。その日記『水左記』には、この疾疫平癒祈願をはじめ多くの造像が知られ、木仏師として長勢一男、長勢二男、覚助弟子、法輪小院、経禅などの名が見える。時を同じくして長勢と兼慶は、法勝寺阿弥陀堂・講堂の造像に当たっていた。その供養は同年十二月十八日であった。法勝寺造像が佳境を迎えたこの時期の、いわば非常時の特需に、長勢はおそらく弟子たちを差し向けたものであろう。円勢も法勝寺造像に従事していたのではと思われるが、まずはこの辺りの規模・格の造像がデビューとしてはふさわしいというべきか。

その法勝寺の八角九重塔の造像が彼の本格的なデビューとなる。これについてはすでに長勢の事績として述べた¹⁵。像は八尺金剛界大日如来像四体、六尺四仏像であった。永保三年（一〇八三）十月一日の供養にあたり、長勢は造仏賞を譲り、円勢が法橋に叙された（『三僧記類聚』所収「法勝寺金堂御仏」）。院政期的な仏師の勸賞譲与の初例といえよう。この後長勢は亡くなるまで、白河帝絡みで法勝寺常行堂造像など中宮賢子追悼造像を手がけた。それらにも円勢が関わった可能性が考えられる。

三、堀河天皇の造像と尊勝寺

応徳三年（一〇八六）十一月二十六日、白河天皇が譲位し、堀河天皇が即位した。わずか八歳で即位した堀河帝は、義理の祖父藤原師実が摂政となりその補佐を受け政務を行なった。堀河天皇関係の造像としては、寛治七年（一〇九三）七月二十七日に清涼殿昼御座にて供養された等身五大尊（『中右記』）、承徳二年（一〇九八）十月二十日供養の祇園御塔五仏（『中右記』、「为国家御祈」とある）、そして円勢の生涯最大の造像となった堀河帝御願尊勝寺の造像に至る。

康和四年（一一〇二）七月二十一日、堀河帝御願の尊勝寺が供養された（『中右記』『中右記部類』『康和四年尊勝寺供養記』）。金堂、講堂、薬師堂、観音堂、五大堂、灌頂堂、曼荼羅堂、東西塔、南大門等が供養され、円勢がそのすべての造像を担当したらしく、その膨大な功績により法印に叙されている。御仏造始は康和二年（一一〇〇）七月二十五日、法勝寺西大門南脇の仏所屋（二字とも四字とも）にて、金堂、講堂、薬師堂、五大堂御仏の御衣木加持が仁和寺覚行法親王のもと行なわ

れ、仏師法橋円勢が弟子三百人を率いて御仏始めを行なった。『中右記部類』¹⁷には、「仏師法橋円勢率弟子三百人御仏作始」に続けて割書で「三十余躰之中、丈六廿二躰」とする。尊勝寺の各堂宇の仏の詳細は知られないが、五大堂は五大尊であろうし、法勝寺の先例を踏まえれば、金堂には胎藏界五仏、講堂には釈迦三尊、薬師堂は七仏薬師が安置されたと思定されよう。これらに金堂講堂薬師堂に四天王を加えれば総数三十二体となり、三十余体に近くなる。また丈六仏も、講堂釈迦三尊の脇侍以外が丈六とすれば、十八体に及ぶ。諸仏が完成し堂に安置されたのが康和四年六月二十九日のことであった。『中右記部類』によれば、白河法皇臨御の中、円勢が金堂、講堂、曼陀羅堂、薬師堂、観音堂に仏座及び御仏を据えた。東西塔の仏はこの日据えられず、供養日当日に安置された（『諸寺供養類記』所収「康和四年尊勝寺供養記」）。五大堂御仏は記述がない。この内観音堂の丈六六観音像は、去る寛治七年（一〇九

三）に法勝寺薬師堂で供養された像であったといい、同年六月二十七日に供養された白河上皇御願の像（『扶桑略記』『後二条師通記』『元亨三年具注曆裏書』）がこれに該当するものとみられる。¹⁸遡ってこの像も円勢作の可能性がある。また曼茶羅堂の仏については、康和三年（一一〇一）三月十二日に、内裏において尊勝寺曼茶羅堂御仏の前で権大僧都良意が尊勝法を修し開眼供養をしており（『修法要抄』所引『時範記』、『中右記』）、この時の造立と知られる。これも円勢の造像の可能性が高い。曼茶羅堂は尊勝堂とも称されており（『康和四年尊勝寺供養記』）、尊勝曼茶羅安置の堂とみられる。結局円勢は、この尊勝寺諸堂御仏の大半を、二百乃至三百の弟子仏師を率いて約二年間で造立したらしい。その間に、白河上皇の鳥羽証金剛院の造像も行なって法眼に叙されてお

び付いたものとみられる。尊勝寺造営は、堀河帝の御願寺に他ならないわけだが、造営中の康和三年二月十三日に堀河帝後見の藤原師実が薨すると、白河院の院政が強化されたとされており、御仏安置に上皇のみ臨御するなど、強い関心を持って実質造営に当たったのは白河上皇であったかとみられる。実際の造営主体者は白河上皇とみるべきか。いずれにせよこの尊勝寺造像によって、円勢は白河上皇と堀河天皇の支持のもと、造仏界の頂点に立ったのであった。

尊勝寺造営はこの後も続き、康和五年（一一〇三）七月五日に阿弥陀堂の御仏が円勢により造始され（『本朝世紀』）、長治二年（一一〇五）十二月十九日に供養された（『中右記』）。その際木仏師長円が法橋になつており、円勢が造仏賞を譲った可能性が高い。円勢と長円の共作ということになる。御仏は丈六九体阿弥陀、八尺観音勢至地藏龍樹、六尺四天王という（『尊勝寺阿弥陀堂供養願文』（『江都督納言願文集』所収）。阿弥陀堂とともに法華堂（五尺多宝塔内に八寸金銅釈迦多宝、同前）、准胝堂（准胝観音とみられるが史料には出ない）も供養されており、木仏師院助が法眼に叙されている（『中右記』）。院助が他二堂の造像に当たったものであるうか。なお准胝堂は「東宮御祈公家所令作給」とあり、後の鳥羽帝のための堀河帝の造像とみられる。

堀河天皇は長治二年（一一〇五）三月十一日頃から御惱となり、病氣平癒のための御祈、造像が数多く行なわれた。同月三十日に院御所にて御祈御仏数体が造始された。円勢は院の丈六御仏、等身七仏薬師、等身尊勝、三尺孔雀明王、等身白衣観音、等身金剛童子、北斗曼茶羅を造始し、同じく法橋院助が等身六観音、等身尊星王、等身八字文殊、三尺琰魔天を造始した（以上『中右記』）。おそらく白河上皇の発願であろう。院の丈六像を含む十三軀の円勢に対し院助は九軀に留まり、尊勝寺新堂

造像と併せて院助の台頭が見えるものの、やはり円勢重用がうかがえるであろう。嘉承二年（一一〇七）七月十九日に堀河天皇は崩御した。遡って七月十日に白河上皇による御惱御祈の丈六大尊が円勢により造始された（『為房卿記』）。堀河崩御の嘉承二年という年は、膨大な数量の病氣平癒御祈造像が行なわれたが、その行方が気にかかる。また上記のように仏師名が出る例はきわめて少なく、ほとんどが作者不明なわけだが、それらをいつたい誰が造像したのか。というよりなぜ知られないのか、興味深いところである。

四、白河上皇の造像

白河天皇は応徳三年（一一〇八）十一月二十六日に堀河天皇に譲位し、上皇となった。長勢は、法勝寺造像以降、中宮賢子追悼造像など白河上皇関連の造像に従事した。それを継いで円勢も白河上皇関連の造像に当たっている。寛治八年（一一〇九）には等身観音像百体を作り（『中右記』¹⁹）、康和三年（一一〇一）には最初の鳥羽御堂である鳥羽南御堂、証金剛院の丈六阿弥陀仏を造立し、その功により法眼に叙された（『殿曆』『中右記部類』）。上皇は上皇となった直後の応徳四年（一一〇八）二月五日に初めて鳥羽南殿に遷御し、以後鳥羽殿を拡張し、この証金剛院はそれに付設された初の院家となった。別業を捨てて寺とするのではなく、浄土に見立てた別業に寺を併設するという、遊興と信仰のいわばハイブリッド状態で、白河上皇の新しい信仰形態であろう。この後、白河鳥羽両上皇により膨大な鳥羽御堂が造営され、その造像の多くを円派が請け負うことになるが、その端緒となった記念碑的な御堂である。白河上皇との関係を確立した造像といえるのでなからうか。

高野大塔造像

康和五年（一一〇三）十一月二十五日に高野山大塔が供養された。白河上皇御願による造営とされ、その五仏を円勢が作っている。高野大塔は正暦五年（九九四）の焼失以後長く再建されなかったが、寛治二年（一一〇八）二月二十七日に、高野詣の白河上皇が御願として大塔を再建すべしと院宣を下したことでようやく始まった（『高野春秋』『扶桑略記』西南院蔵「寛治二年高野御幸記」）。嘉保二年（一一〇九）に大塔が造始され、その五仏は康和五年三月十一日に大仏師法印円勢により造始されている。五仏は『中右記』供養日条によれば胎蔵五仏で各丈六とされる。²⁰同年十月二十五日に大塔に安置された。

この造像を円勢が担当し得たのは、やはり白河上皇発願による造像であったためとすべきであろう。白河上皇のもとで肥大化した円勢の権威を象徴する事績と解釈することができる。ただし円勢が実際に現地入りしたわけではないらしく、「法印円成代敷」とされる「仏師五人」²¹が手斧始に当たったらしい。『高野山旧記』には「仏師円成法印、大仏師等下以弟子講師原造之」とあり、弟子の「講師原」すなわち僧綱位を持たない講師クラスの仏師を派遣して造像に当たらせたとある。円勢本人は出向かず弟子に行かせて作らせたという、なんとも横柄な所業だが、こうしたこともあったのである。円勢の傲りというべきか。いずれにせよこの期造像の実際を知りうる事例といえよう。

仁和寺北院薬師如来像

高野大塔造像とほぼ同時期に、円勢唯一の遺作仁和寺旧北院本尊薬師如来像が作られている。康和五年（一一〇三）正月八日に、大御室性信（一一〇五～八五、後三条帝皇子）が永保二年（一一〇八）に創建した

北院が焼失し、その本尊である弘法大師所持の薬師像も焼失した。性信を後継した中御室覚行（一〇七五―一一〇五、白河帝皇子、堀河帝兄）はその再建に当たり、薬師像の再興は円勢と長円父子が担当し、同年四月一日から五月四日まで造像が行なわれた。造像の詳細は伊東史朗氏の研究に詳しい。²³中御室覚行は白河帝の寵愛を受けて初の法親王となり、以後代々天皇の皇子が法親王となって仁和寺を仕切る初例となった。この造像が円勢の担当となったのも白河上皇の意向が働いていることと考えるべきであろう。そしてこの造像に円勢と長円が実際に仁和寺に毎日出向いて当たったことと、先の高野大塔造像に円勢が現地に出向かなかったことは、関係があったのかも知れない。都の重要な仕事を優先した円勢であったとすれば理解できる。

清水寺別当補任事件

天仁元年（一一〇八）十二月十二日に、同年代でしかもいわばライバルの仏師院助が没した。傍系の円勢としては目の敵であったにちがいない。定朝正系の覚助、院助は早世の系らしく、長勢と同じく円勢はその長命で円勢の隆盛をもたらすこととなった。これによって円勢は仏師界の頂点に君臨することになった。その勢いがよくあらわれたのが清水寺別当補任事件である。

天永四年（一一一三）閏三月、円勢は白河上皇の院宣により清水寺別当に補されたが、興福寺大衆の強訴を受け、解任された。いわゆる永久の強訴である。この一件については、根立研介氏が長円の興福寺大仏師補任と合わせてその経緯に触れているが、²⁴ここでは円勢事績として詳細をみてみたい。『永久元年記』²⁵等によれば、閏三月二十日興福寺大衆数千人が入京して勸学院（氏院）に入り、円勢別当補任のことを訴えた。

翌二十一日これを受けて、円勢の別当を罷免し、興福寺の権大僧都永縁をこれに替補した。円勢の補任は白河上皇の院宣によるという（『長秋記』²⁶）。

遡って天永三年（一一一二）十一月二日、清水寺に盗が入り別当勝快上人を傷付け、そのせいで十一日に勝快は七十余歳で入滅した。勝快は下臈僧だが、清水寺生え抜きの念仏聖で、虚空蔵房とも呼ばれ、多くの人々から尊崇された聖人であった。ここ三、四年別当として堂の修理、一切経蔵の新造等に当たり「一切仏事全無懈怠」であったとされる（『中右記』）。円勢の別当人事はこの勝快の後任人事とみられ、生え抜きの別当の死去に乗じる形で、白河上皇は院宣で円勢を補任しようとしたようである。『殿暦』によれば、この人事に対する清水寺の訴えが興福寺別当覚信にあり、それに応じて興福寺大衆の入洛に至った。『永久元年記』に引く『重隆記』によれば興福寺側の訴えは次の通りである。清水寺は興福寺末寺で、興福寺僧がその職に任じられてきているが、中古に仏師定朝が別当となったことがあり、今回その例によって院より補任されている。しかし、定朝は清水寺において出家得度しているが、円勢は延暦寺にて出家しており興福寺僧ではないので、この補任は認められない。つまり円勢は興福寺僧ではないので認められない、興福寺僧にすべきとの訴えである。この訴えが翌日院において諮られ、結局白河上皇が折れて円勢は解任され、興福寺権別当権大僧都永縁を清水寺別当とすることで落ち着き、興福寺大衆は二十二日に奈良に帰った。帰りに大衆は祇園の堂舎を襲ったらしく、その報復として延暦寺大衆が二十九日に清水寺の堂舎を壊し、院に首謀者興福寺僧実覚の処分を求めている。興福寺と延暦寺の対立は、京都における双方の最前線である、近接する清水寺と祇園社の抗争としてたびたび顕在化した。このことが今回の人事

騒ぎの根底にあるらしい。興福寺側の言い分とすれば、仏師がなるのは百歩譲って良しとしても、延暦寺僧の補任は許容しがたいと言ふことか。

円勢はなぜ清水寺別当を望んだのであろうか。白河上皇の人事介入の道具となったとの政治的解釈が一般的だが、やはり当事者円勢の求めに応じて白河上皇が無理強いをしたとみるのが妥当であろう。伝えられる通り、定朝の補任例に倣ったことだろうか。すでに法印の極位にあった円勢へのさらなる名誉職的な称号の授与なのか。そもそも仏師が別当職に着くことでどのような利得があるのだろうか。またなぜ清水寺別当なのか。仏師が別当職に就けば、その異例性はさておき、その寺の造仏を含む造営全体を仕切ることになり、仏師の側からすれば造像仕事の一時的ではあるが確保となり、寺側からすれば造営修造の進捗が見込めることになる。このことは、後の長円の事例を検討する場で考えるのがふさわしいようである。

長円は大治四年（一一二九）十一月に、まず興福寺大仏師職を求め、その上で清水寺別当となったようである（『中右記』）。つまり、興福寺僧の資格を得た上で清水寺別当にという、先の興福寺側の言い分に沿うようにしたらしい。問題は目的が興福寺大仏師になることではなく、清水寺別当になることであつたことである。これは円勢のなし得なかつたことの再挑戦である。そこまでして清水寺別当職を求めた理由は改めて何なのか。師長勢も清水寺別当にあつたとする史料がある。『二中歴』第十三「仏師木」として長勢の名が載るが、その割注に「清水寺別当法印／定朝弟子」とあり、長勢も清水寺別当であつたと伝えている。このことは他史料には出ないのでこれが事実かどうかは不明とせざるを得ないが、定朝、円勢、そして長円が清水寺別当になったことを思えば、あり得ないことではなからう。そもそも定朝が清水寺別当になつたというこ

と自体確実ではないのだが、仮にそうとすれば定朝から円派系に受け継がれた職との可能性もある。²⁷

また円勢は延暦寺にて出家したという。定朝が清水寺で出家したとすることと同じく、傍証史料はなく何とも言えないのだが、この後円勢の孫に当たる円信が尊勝寺阿闍梨に補された（『究竟僧綱補任』）ことが気にかかる。尊勝寺灌頂は北京三会に準ずる重要法会とされ、その阿闍梨位は僧綱位昇進の重要ルートであつた。永久元年九月二十二日に尊勝寺灌頂は天台二門に付されており（『朝野群載』）、であれば円信が天台系の僧であつたことを示すことになる。とするなら、円派の系譜の特徴といえるのかも知れない。

この清水寺別当補任事件には後日談がある。この事件の根底に興福寺と延暦寺の対立があり、これに引き続いて祇園社にて小競り合いがあつたことはすでに述べた。延暦寺僧が入洛して首謀者興福寺実覚の流罪を求めたのに対して、興福寺側は実覚の免罪と山座主仁豪等の流罪を求め、再び大衆が上洛して四月三十日に宇治辺での平正盛・忠盛との戦いとなつた。その後ややおいて、五月二十五日に興福寺僧の白河上皇呪詛のことが発覚し、六月七日に張本の二僧が罰せられ、併せて仏師頼助が呪詛に関わる不空羅索を造立したとして勘当有るべしと院より藤原忠実は命ぜられていた（『永久元年記』）。ただこれは事実誤認とされ勘当は解かれたらしい。六月十二日条によれば、呪詛の時に頼助は逃げ隠れていて関わっていなかったとされる。白河上皇の支持（あるいは指示）で清水寺別当を望んだ円勢に対し、それに反対した張本興福寺の「御寺仏師」として白河院呪詛の造像をしたと疑われ、白河院から袖にされた頼助であつた。法橋頼助は、元永二年（一一一九）六月九日に六十六歳で没した（彰考館本『僧綱補任』）。生年は天喜二年（一〇五四）となり、

円勢とはほぼ同世代とみられる。覚助の子で定朝直系の頼助は、興福寺を中心に藤原摂関家との関係が強く、白河院とは疎遠であった。円勢の造仏独占を遠目で見ていたとみられ、円勢にとってはライバルというほどではなかったと思われるが、定朝直系の存在は気になっていたに相違ない。その死は円勢をまさに造仏界の頂点に立たせることになった。

白河泉殿九体阿弥陀堂造像

永久年間以後の円勢は、引き続き白河上皇関係の大規模造像に当たり、円派隆盛の基盤を築いてゆく。永久二年（一一一四）十一月二十九日供養の白河上皇御願白河泉殿九体阿弥陀堂の九体丈六阿弥陀像を子息長円・賢円とともに造立し、賞を賢円に譲り法橋とした（『為房卿記』『中右記』）。法勝寺及び尊勝寺造営の間の白河上皇の御所白河泉殿付設の御堂である白河御堂の最初²⁸の堂で、以後主に鳥羽上皇によって多くの御堂が造営されていく。『殿暦』は円勢の譲りで「円勢次郎」が法橋になったとし、『中右記』はそれを忠円とするが、『為房卿記』は、十一月十九日の御仏奉渡に際して法印円勢が馬と被物、法橋長円が被物を賜り、供養日の勸賞について、大仏師円勢の譲りで賢円が法橋になったことと法橋長円の賞は追って申請すべしとされたことを伝えており、一番詳しくかつ話に整合性がある。『為房卿記』の記述を信ずべきと思われる。円勢二男賢円がこの時法橋に叙されたものと認められる。長円に続いて二男賢円も法橋として、木仏師の僧綱三人を占め、着々と一門の勢力を拡張していった円勢であった。

五、待賢門院璋子の御産御祈造像

鳥羽天皇中宮藤原璋子（待賢門院、以下待賢門院と呼ぶ）は、白河上皇との関係が取り沙汰され、鳥羽帝との不仲が語られる女院である。待賢門院は多産であった。元永二年（一一一八）五月二十八日誕生の第一皇子顕仁（後の崇徳帝）、保安三年（一一二二）六月二十七日の禧子内親王、天治元年（一一二四）五月二十八日の第二皇子通仁、同二年五月二十四日の第三皇子君仁、大治元年（一一二六）七月二十三日の統子内親王（後の上西門院）、同二年九月十一日の第四皇子雅仁（後の後白河帝）、大治四年閏七月二十日の第五皇子本仁（後の覚性法親王）の都合五男二女をなした。その都度、白河上皇や鳥羽天皇により膨大な御産御祈仏事造像が営まれた。

大量造像の行方

いくつか造像事例をあげよう。天治元年の通仁誕生に際して、同年三月二十日に三条殿にて白河上皇御願として、等身の仏眼、尊勝、如意輪、六字、白衣、孔雀明王、愛染王、不動明王、大威徳、尊星王各十体と五尺塔一基（大日安置）、五寸塔十万基（釈迦多宝各十万体安置）が供養されている。身屋に百体の像が三列に列べられその前に御塔が置かれたという（『御産部類記』所引『花園左府記』『忠教卿記』³⁰）。『中右記』同年五月十八日条には通仁の時の御産御祈について「凡此間毎有吉日、中宮御産御祈千万、不可記尽」とあり、誕生間近の五月二十一日には院近臣の造仏が「各三体・五体、丈六・等身・三尺相争」いて行なわれたという（『為隆卿記』³¹）。また、第三皇子君仁の五月十一日、十九日、二十三日の三度の御仏供養で「数百体」が供養されたといひ（『中

右記』、第四皇子雅仁の際の大治二年八月十四日には法勝寺にて女院御産御祈として造仏二百六体（丈六七体、他は等身三尺という）がなされたという（『雅兼記』）。これはほんの一部に過ぎず、まさに膨大な数の造像が行なわれたが、それを行なった仏師のことは、後述する円勢などを除けばほとんど知られることはない。またこれだけの像がどこに行ってしまったのかも不明だが、君仁の時の天治二年五月十九日に供養された「雑々御仏」³²（『為隆卿記』）は供養の後法勝寺に渡されたといい、法勝寺がこうした造像の集積場であった可能性が考えられる。先に述べた白河上皇の百体等身観音は円勢の許から法勝寺に運ばれており、多くの造像は既存の大寺に引き取られた可能性が考えられよう。待賢門院関係の像は、どうやらその御願寺円勝寺に多くが収められたようである。大治三年（一一二八）三月十八日供養の円勝寺は、『中右記部類』によれば、金堂、五大堂、西堂と塔三基があり、金堂西の西堂には「旧像数百体」が安置されたといい、また「円勝寺供養祝願文」（『本朝統文粹』一二所収）によれば、五大堂の丈六五大尊もこの西堂の像も「年々刻彫、度々供養」の旧像であったという。この円勝寺の旧像数百体が待賢門院御産関係の像であった可能性が高い。唯一天皇御願寺ではない円勝寺は、まさにこうした機能のために白河上皇の発意による特例で設けられた寺であったといえるのかも知れない。

円勢の造像をみてみよう。まず元永二年の顕仁御産に際して、前年の十月二十四日に中宮御祈の丈六不動尊像が法勝寺五大堂にて白河上皇臨御のもと供養され、円勢は御馬を賜った（『殿暦』）。誕生の五月二十八日当日、院南庭にて、円勢が丈六仏像数体を造始した。仏は丈六不動明王と同六字明王という（『中右記』『源礼記』、『同委記』）。³³さらに誕生後の六月七日に、院にて皇子御料御仏三尺十体が造始され、円勢がこれ

に従事した（『長秋記』『中右記』）。この翌々日の六月九日に法橋頼助が六十六歳で没した（彰考館本『僧綱補任』）ことは、先述の通りである。円勢の権威はますます確固たるものとなったのである。

続いて天治二年（一一二五）の君仁御産の造像である。同年五月二十四日の御産当日、御産に先立って院御所三条烏丸亭南庭にて丈六御仏が造始された。円勢法印が「弟子両法橋」を率いてこれに当たったという（『為隆卿記』）。仏は『為隆卿記』が「丈六御仏五体」、『中右記』は「丈六尊勝仏三体」とする。『中右記』は本院（白河上皇）・新院（鳥羽上皇）・女院庁の作り奉るとするので、そうであれば三体が数的にはふさわしいか。「弟子両法橋」は誰であろうか。一人は賢円で、もう一人と思しい長円はこの時すでに法眼位にあつて合致しないが、後述する共同事績から長円と賢円とみるのが妥当であろう。

東寺文書百合外とされる天治二年の「法師円勢仏供養具目録」³⁴は、法印円勢等が丈六不動尊一（立御仏）に、金銅閻伽具一揃等供養具を献じた目録とみられる。この年法印位にある円勢は、本稿で論じている円勢を置いて他にいない。円勢が供養具を献じたものとみられる。文末に出る「女院」が待賢門院とみられることや、この文書が東寺に伝わることからこの造像を割り出すと、同年三月十八日に東寺食堂にて供養された、白河上皇御願女院御産御祈の丈六御仏に至る（『中右記』『為隆卿記』『朝隆卿記』）。本来は法勝寺にて供養すべきところ、「方角禁忌」により東寺にて供養されたという（『為隆卿記』『朝隆卿記』）。『中右記』は御仏九体としながら、その内訳を五大尊と不動尊三体としており、とすれば『為隆卿記』が伝える八体が正しいことになる。その時の不動明王立像一体の供養具を円勢が施入したものである。であれば、その不動一体乃至は御仏八体の造像も円勢が担当した可能性が出てくる。その

可能性は高いものと考えてよからう。『中右記』は五月十一・十九・二十三日の三度の数百体に及ぶ御産御祈造像について、「或近習受領等、依私志作之、或出従御慮」（五月二十三日条）とするが、円勢も白河上皇の「近習」として供養具の造進を行なったものか。第一皇子顕仁（崇徳帝）御産時の元永二年二月十四日の御仏供養（五大尊等十体）の際、「仏布施・仏供・御燈明、各自造仏所被進（云々）」（内割書）であつたというので（『祭資記』（藤原資光記）、造仏所が供養具等を寄進する例があつたことがうかがえる。これは、後述する円勢の仏造進のことに連なっていく。

六、大治四年の造像（女院御産御祈と白河院崩御）

この後大治二年の第四皇子雅仁の際の円勢造像は知られないが、大治四年の第五皇子本仁の時は、白河上皇の崩御が重なり、まさに膨大な仏事造像が営まれ、円勢の造像も知られてくる。同年二月末から御産御祈が始まり、閏七月二十日に本仁が誕生した。³⁵その前の七月六日夜白河上皇は俄に不例となり、翌七日に崩御した。この頃をピークとする大治年間の造仏事業については、上川通夫氏が造寺造像年表をもとに、「成立期日本中世仏教」の実態を把握する一助として、造寺造仏事業の推進を通観している。³⁶その膨大な様は、すでに歴史学や美術史学で十分に指摘される³⁷ところである。ここでは円勢の事績に絞って抽出してみたい。

まず待賢門院御産御祈の方だが、白河崩御後の七月十日、円勢、長円、賢円等の造るところの女院御祈仏をすべて長円弟子の許に運び渡すべし、との女院別当から檢非違使への仰せがあり、これはこの三人が本院御仏を造ることになったためという（『長秋記』）。女院御産御祈仏の

造像は三月十九日以後度々行なわれて膨大な数に上り、円勢以下が造立していた像を特定することは困難である。³⁸とにかくその膨大な造像の多くを請け負ったのがこの三人であつたことは確かであろう。ここに出る「本院御仏」が何かは後述する。

続いて、白河崩御時とその後の追悼造像をみていこう。崩御直前の七月六日、白河上皇は二条御所に幸し、そこで丈六愛染王三体、等身同像二十体、「□尊小塔等」が「是法皇御息災御祈也」として供養された。これは、白河上皇がこの日夜俄に不例となる前のことで、一般的な御息災御祈と思われる。この供養の最後の「□尊小塔等」は「法印円勢造進」という（以上『永昌記』）。「尊」とあるので何らかの尊像と小塔と解すべきか。³⁹愛染王像を造進したのは新参議藤原長実と顕盛父子でいずれも白河院近臣である。彼らとともに円勢が小塔等を造進したのは、円勢と白河上皇の関係性を改めて鮮明にするもので、また長実父子とは比べべくもないが、その富裕さを示すものとも理解される。先に円勢の供養具寄進のことを述べたが、仏師も白河院近習として、その膨大な造像事績の一端を、その造像技能のみではなく経済的にも担っていたといえるだろう。このことの直前まで、女院御産御祈仏が、百体、十二体と例の如く終日供養されていたという（『永昌記』、小塔等造進の記事の直前に記される）。この供養は法皇の死に際しての祈願ではないのだが、ともあれ、これ以降造像の対象者と願意は、待賢門院から白河上皇へ、そして御産御祈から追悼へと変わっていったのであつた。ただ、だからといって同じ像が別な御祈に転用されはしなかったようである。先の例のように、待賢門院のための像は撤去され、白河院の追悼像「本院御仏」が作られ始めるのである。

その、七月十日時点で円勢、長円、賢円の三人が制作予定であつた

「本院御仏」は何であろうか。これも特定するのがむずかしいが、可能性のある事例をあげておこう。一つは、崩御の七月七日早朝から三条烏丸西第南庭にて仏師数百人により造始された丈六御仏五体（『中右記』『長秋記』）である。その「銚音及隣里」（『永昌記』同日条）という。御産や崩御直前に丈六御仏数体が造立されるのはこの頃の通例仏事であったようだが、この時は五重塔まで工国末によって建てられた。そうした法皇崩御に際してのとりわけ重要な造像に円勢等が関わった可能性は大いにある。ただし、七月十日時点ではすでに造像が始まっていたわけで、あくまで制作予定であったとするなら対象外となる。

円勢以下三人が関与したことに着目すれば次の造像の可能性がある。女院御産当日の閏七月二十日、法勝寺阿弥陀堂にて故白河上皇中陰法事が修され、待賢門院御仏の「半丈六木像阿弥陀五仏」が供養された。この時女院は御産直前でこの法事に参列せず仏のみを送っての供養となった。この造像は、中尊が法印円勢、脇侍四体が「子法眼法橋」各二体で、脇侍を五尺とするか四尺五寸とするかで子二人の間に相論があり、結局脇侍左右の寸法が異なったという（以上『中右記』⁴¹）。『中右記』には仏師名は出ないが、法眼が長円、法橋が賢円とみられる。まずは円勢が、子息長円と賢円を従えて白河院追悼造像に従ったことに注目すべきであろう。故白河院追悼仏事の最大の願主は鳥羽上皇に他ならないが、待賢門院は少なくともそれに準ずる、あるいは故白河院との関係からいえばそれ以上に大きな存在であったといえるべきであろう。御産御祈から引き続き女院による追悼造像も請け負った円勢等であった。この長円と賢円の法量をめぐる相論のことから何を読み取るべきであろうか。これについては、長円賢円を論ずる場で検討したいが、脇侍四軀をどのように分けたのか。なぜ寸法がバラバラになるなどという事態が起こりえた

のか。そのあたりが問題となろう。

引き続き円勢の故院追悼造像をみていこう。八月二十八日、院西対西廂にて円勢は阿弥陀三尊を造始した（『長秋記』）。供養日が不明だが、九月七日の故院月忌の御仏が半丈六阿弥陀と四尺五寸脇侍なので（『長秋記』）これに当たる可能性が考えられる。であれば故院追悼御仏となろう。同日仏師院覚も同所にて白檀普賢を造始した（『長秋記』）。先に円勢、次に院覚が造始を行なったようだが、この時に円勢は袈裟の下に浄衣を着し、院覚は袈裟の上に浄衣を着したと記主源師時はコメントする。文意が不明だが、院覚がこの時初めて鳥羽院の召しに応じたことや定朝・覚助・院助と連なる「大仏子」であると伝える文脈を含んでのもので、院覚という正統仏師の登場に絡んで、円勢への批判的ニュアンスを含むコメントかと思われて興味深い。院覚の三尺白檀普賢は九月二十八日に、鳥羽院、待賢門院等の結縁経供養の御仏として供養された（『長秋記』）。鳥羽院の重要な造像への従事であった。いずれにせよ、院助、頼助亡き後造仏界の頂点で白河上皇の庇護のもと造像を寡占した円勢等円派仏師であったが、鳥羽上皇への代替わりとともに、より正統的なライバル仏師の登場をみるようになったのであった。

蓮華藏院造像

大治五年（一一三〇）六月二十四日、白河新阿弥陀堂中の御塔（三重塔）が供養された。仏師は円勢法印とある。⁴²また七月二日には白河新阿弥陀堂中の九体丈六阿弥陀堂が供養され、そこで故白河院の周忌法事が修された（『長秋記』『中右記』）。白河新阿弥陀堂とは、前出の、永久二年（一一一四）十一月二十九日供養の白河上皇御願白河泉殿九体阿弥陀堂のことで、その丈六九体阿弥陀像を円勢、長円、賢円が造像している

〔為房卿記〕〔中右記〕。そこに鳥羽上皇が故院のために新たに御塔及び御堂を建立し、周忌法会を行なったのであった。後にこの二棟の九体丈六阿弥陀堂と御塔は併せて蓮華藏院の院号が付されている。九体阿弥陀堂は賢円の造立と出るが〔長秋記〕〔中右記〕、彰考館本『僧綱補任』によれば、この時賢円は円勢の譲りで法眼になったように、御塔及び御堂の造像は、併せて円勢と賢円による造像であったと想像される。知られている円勢最後の造像である。関係深い故白河院の追悼御堂御塔の造像をやり遂げたところで引退したのであろう。

藤原忠実の造像

円勢は院・女院・公家の造像がほとんどだが、藤原撰関家の造像もわずかだが知られる。嘉承三年（一一〇八）六月二十三日造始の北斗曼荼羅五十余体（〔中右記〕）と、永久二年（一一一四）八月二日法成寺講堂にて供養の丈六大威徳像（〔中右記〕）である。いずれも「殿下」藤原忠実の願とみられる。北斗曼荼羅造像は、翌天仁二年（一一〇九）二月二十七日供養の法勝寺北斗曼荼羅堂（〔殿暦〕『江都督納言願文集』所収願文）があり、これとの関係が気になるが、造像の場が忠実の許であったことは確かなようで、忠実の発願とすべきなのであろう。⁴³やはり忠実等撰関家の造像は主に院助が請け負ったに相違なく、ならば同年十二月十二日の院助没に至る間の何らかの事情が円勢への依頼につながったとも考えられる。いずれにせよ、円勢の撰関家造像は異例であるが、子長円が天仁二年（一一〇九）に忠実の丈六大威徳像を手がけたことを勘案すれば、円勢一門の受注が院関係に留まらず撰関家関係にまで及んだと解釈すべきか。

『僧綱補任』によれば、法印円勢は長承三年（一一三四）閏十二月二

十一日に亡くなった。蓮華藏院造像から四年を経ている。子息長円はこの時法印で清水寺別当、二男賢円も法眼位にあり、円派は一応の安定的な立場にあるが、院覚や康助の台頭もあって先行きは予断ならない状況である。大治四年十一月三十日に長円は、父円勢が果たし得なかった清水寺別当に補任された（〔中右記〕〔長秋記〕）。円勢の鳥羽院への最後の圧力が功を奏したものであろうか。円勢は鳥羽院政への対応を子息に委ね、去って行ったということであろう。

七、子息と弟子

円勢の後継者については、黒川春村の説に対する谷信一の修正案に対して小林剛がさらに系譜の訂正を行なった通り、一男長円、二男賢円の二人であることは疑いない。これは、永久二年の白河上皇御願白河泉殿九体阿弥陀堂（後に蓮華藏院となる）造像における円勢の共作者が、長円ともう一人は誰かと言うことで、それが典拠史料により「忠円」「慶円」「円経」と錯綜し、特に〔中右記〕が「忠円」とするので、円勢二男を忠円とする説が谷信一によって行なわれたが、小林剛の考証により否定され長円・賢円の二人と確定した。⁴⁴

長円と賢円に対する師円勢の処し方はこれまでの事績検討の中で触れてきたが、整理しておこう。まず長円を仁和寺北院造像でデビューさせ、尊勝寺造像で法橋とするまでは共同作業者として補助してきた。それが天仁二年（一一〇九）六月二十四日造始の藤原忠実丈六大威徳像（〔殿暦〕）あたりから単独で仕事をさせ、元永元年（一一一八）十二月十七日供養の鳥羽帝御願最勝寺（〔殿暦〕〔中右記部類〕）の造像を長円に行なわせ、長円は法眼に叙されている（彰考館本『僧綱補任』）。彰

考館本『僧綱補任』は円勢の関与を伝えないので、長円が自力でこの造像に当たったものと推察される。鳥羽帝御願寺の造像を任せしたのは、円勢の政治的な判断で、次代を担う鳥羽帝と長円との関係性の構築を図ったとみられ、またそれをなし得たのはこの時の円勢の立場の強さ（白河上皇との強固な関係）を示しているよう。この長円と鳥羽帝との関係が、長円の、円勢がなし得なかった清水寺別当補任に結び付いていったとみられるのである。長円はその後、待賢門院の円勝寺造像に関わった可能性が高く（息長俊を法橋とした）、近衛帝の延勝寺造像を行なっており、結局、仏師不明の崇徳帝成勝寺を除いて六勝寺のうち五ヶ寺までを円派が手がけたことになったらしい。鳥羽院との関係性が表れているといえよう。

一方賢円に対しては、いずれも勲賞讓与により永久二年の白河泉殿九体阿弥陀堂造像で法橋とし、大治五年の白河九体新阿弥陀堂で法眼とした。それ以後賢円は単独造像を始め、長円と同様鳥羽帝との関係を築き、その造像を長円とともに寡占していくことになる。ともあれ、円勢没の時点での造仏界は、法印円勢を頂点とし、法眼に長円・賢円二人がおり、院覚と康助は法橋で、円派が仏師僧綱上位を独占する状況にあった。まさに円派隆盛を築いて円勢は世を去ったのであった。

円勢の弟子は、康和二年の尊勝寺造仏始めにおいて、「弟子三百人」（『中右記』）ともあり、多くの弟子を抱えて工房を経営していたことが知られる。『元亨四年具注曆裏書』には、この時のことについて大仏師円勢に次いで「次仏師」八十人、「小仏師」百二十人とあり、大仏師に次ぐ「次仏師」なる存在があったらしい。⁴⁶合わせて二百人となり、三百人か二百人か、いずれにせよ大人数の仏師を抱えていたようである。その頂点には長円、賢円がおり、その下の次仏師にいわゆる「講師原」仏

師が含まれる、という工房構成であったのであろう。おそらくこの頃が、長円賢円独立前で、円勢工房の規模が最も大きかった時期と推察される。

おわりに

以上円勢の生涯と事績を詳しく検討してきた。その結果として、これまでの円勢観が覆るようなことはなく、白河上皇との密接な関係（事績がそれを示すのみで、具体的に証するエピソードは見出せなかったが）をもとに、関連する院や待賢門院関係の多くの造像に従事し、それを後継の長円、賢円に引継ぎ、円派の礎を築いたというこれまで通りの円勢観に落ち着いた。康和年間の鳥羽の証金剛院、そして尊勝寺造像が彼の仏師界での立場を決定付けることになった。とりわけ、法勝寺に次ぐ規模で、白河上皇が熱心に造営を進めたとみられる尊勝寺は、その造像のほとんどに従事したとみられることで、まさに畢生の大規模造像として、彼の造仏界における位置を決定付ける最重要造像であったと見做された。さらに鳥羽御堂、白河御堂の初例の造像に当たったことも、その後の円派の両御堂造像への関与を決定付けたといえるものであった。また、待賢門院御産造像を追う過程で、大量かつ大規模な各種御祈造像の行方についておおよその目安を得ることができたのは望外の成果であった。院政期造像の実態の一部を明らかにし得たと思われる。白河上皇崩御をピークとする大治年間までの膨大な造像の内、仏師の名が知られるのはごくわずかだが、そのほとんどが円勢とその師弟である。翻って膨大な造像には多くの無名の仏師も含まれたろうが、造像受注の中核に円勢とその師弟がいたであろうことは疑いない。円勢ブランドの造像をオー

トマチツクにこなした多くの無名の仏師の存在が円勢工房の大量生産を支えたことだろう。

その円勢の作風はどのようなものであったろうか。このことは円派仏師の作品として別稿をなす予定だが、最後にごく簡単に触れておきたい。

長円との共作になる円勢唯一の遺作仁和寺旧北院本尊薬師如来坐像(図)について、伊東史朗氏は、その「幼児を思わせる体格と面貌」から康尚時代の様式を規範とした作風と分析された。⁴⁷この見解の当否はさておき、定朝様造像の規範の問題は重要で、平等院鳳凰堂像のみではなかつたらしいことが認められつつあり、本像のような、上下が詰まっておめかみ部の広い幅広の顔の外形とそれのおっとりした面貌は、この十二世紀前半の円派作例の定型とみられ、その始まりをこの仁和寺像に求めることが可能ではないかと考えている。いわば円勢顔の流布である。円勢の作風が円派の作風として継承され、その結果、十二世紀前半期の定番となるといった流れが想定されるのではないだろうか。

注

- 1 武笠朗「仏師長勢―円派仏師研究(一)―」(『実践女子大学美学美術史学』三四)二〇二〇年三月。
- 2 『日本美術大系 第二巻 彫刻篇』誠文堂新光社、一九四一年二月。
- 3 昭和三十二年(一九五七)三月の『蓮華王院本堂千手観音像修理報告書』(丸尾彰三郎執筆編輯、妙法院)ではまだ使われない。「院」系、「円」系などとす。
- 4 西川新次「藤原彫刻」(『阿弥陀堂と藤原彫刻』(『原色日本の美術』六)

所収)小学館、一九六九年四月。「円勢一門(一族)」「院派」「康派」とする。

- 5 中野玄三『藤原彫刻』(『日本の美術』五〇)至文堂、一九七〇年七月。
- 6 谷信一「円勢法印考―歴世木仏師研究の一節として―」(『美術研究』三〇)一九三四年六月。
- 7 以後、谷はこの副題で、「仏像造頭作法考」などいくつかの重要論考を『美術研究』に執筆している。
- 8 田中豊蔵「仏師定朝」(『日本文化叢考』(『京城帝国大学法文学会論纂』第二部第三輯)所収)刀江書院、一九三二年九月、『日本美術の研究』所収、二玄社、一九六〇年十一月、増補版一九八一年。
- 9 これに先行するのは、安政三年(一八五六)黒川春村編の『歴代大仏師譜』である。『歴代大仏師譜』(『墨水遺稿』三所収)一八九九年七月、吉川半七刊。巻上に「法印円勢」の項がある。
- 10 伊東史朗「仁和寺旧北院本尊薬師如来檀像について」(『佛教藝術』一七七)一九八八年、『平安時代彫刻史の研究』所収、名古屋大学出版会、二〇〇〇年四月。
- 11 「円成」は『高野山旧記』等(後出)、「円清」は清水寺別当補任に絡んで『春日神社祐賢記』等に出る。
- 12 『僧綱補任』は、以下、特に注記しない場合は興福寺本を指す。
- 13 ただし同書は、同日法橋補任の院助も「長勢子」と誤記する。
- 14 『僧綱補任』による。木仏師絵仏師併せて四人でいずれも法橋位。
- 15 前掲武笠論考(注1)。
- 16 『中右記部類』による。『為房卿記』では「小仏師百三十人」、「元亨四年具注曆裏書」では「次仏師八十人」「小仏師百二十人」とする。『元亨四年具注曆裏書』は、大仏師、次仏師、小仏師とするが、「次仏師」というのが大仏師にまさに次ぐ仏師を指す呼称とすれば、前稿で述べた法成寺復興造像における仏師覚助の「次仏師」のことが思い起こされる(前掲武笠論

- 考(注1)。また、いずれも御仏始の儀式の詳細を伝える。
- 17 『中右記別巻 九条家本中右記部類』(『大日本古記録』)。
- 18 六観音は千手、聖、馬頭、不空羂索、如意輪、十一面という(『修法要抄』所引『時範記』)。
- 19 この像は円勢の工房から法勝寺に渡されている。後に触れることになる。
- 20 『高野山旧記』所引『大塔日記』によれば、五仏大日、薬師、宝生、無量寿、釈迦とある。
- 21 久安五年(一一四九)五月日付「金剛峯寺焼失修復注進状草」『大日本古文書 高野山文書』八所収、一七四二文書。
- 22 講師仏師及び「講師原」については次の論考参照。西川新次「宮廷仏師とその周辺」(『院政期の仏像』所収、岩波書店、一九九二年。武笠朗「経円」(『仏師と仏像を訪ねて』七)(『本郷』一四〇)二〇一九年三月。
- 23 前掲伊東論考(注10)。
- 24 根立研介『日本中世の仏師と社会』第一・三章、塙書房、二〇〇六年五月。
- 25 『群書類従』二五雑部。『大日本史料』三一—四。
- 26 この一件は政治史の方では、白河院の寺院統制における人事介入の問題として取り上げられている。美川圭『院政の研究』第四章、臨川書店、一九九六年十一月。元木泰雄『藤原忠実』(人物叢書二二四)吉川弘文館、二〇〇〇年三月。上川通夫『平安京と中世仏教』Ⅱ第二章、吉川弘文館、二〇一五年十月。
- 27 承保二年(一一〇七五)四月三日付「珍皇寺所司大衆等解案」(『平安遺文』一一一〇文書)に「清水寺別当法眼定朝」と出ることが間接的資料として注目される。関根俊一「仏師定朝の清水寺別当補任について」(『帝塚山芸術文化』一二)二〇〇五年三月。
- 28 この御堂は、大治五年(一一三〇)建立の九体丈六阿弥陀堂(後述する)と併せて後に蓮華藏院と号されることになる。十一間四面の堂は平正盛、仏は藤原顕盛の造進であった。
- 29 『白川御堂供養記』では長円が法橋に叙されたとするも、「後聞」として「法橋長円弟子」の「慶円」が法橋になったとし、彰考館本『僧綱補任』は「円勢二郎」の「法橋円経」とするなど、情報が錯綜している。
- 30 『御産部類記』上・下(『図書寮叢刊』)。「待賢門院璋子の御産御祈造像」の項の典史料は一部を除いてこの『御産部類記』所引である。ただし『殿暦』『長秋記』は所引ではない。
- 31 『永昌記』と同じだが、『御産部類記』所引として『為隆卿記』とする。
- 32 『中右記』では「造仏数十体」とする。
- 33 『長秋記』は丈六仏五体とする。「斧音徹梵天歎」とあり、造像の斧音が天に届きそれが御産時の厄難を退けると考えられたか。なお六字明王は、その新奇性からきわめて白河上皇的な尊像とされる。津田徹英「六字明王の出現」(『MUSEUM』五五三)一九九八年四月、『平安密教彫刻論』所収、中央公論美術出版、二〇一六年二月。
- 34 『平安遺文』古文書編一〇、四九七八文書、文書名は「法印円勢」とすべきか。
- 35 この間三月十九日、二十四日、五月十三日、二十五日、二十七日、六月四日などに大量造像のことが見える(『中右記』『長秋記』)。愛染王造像が非常に多いことが注目される。
- 36 上川通夫「大治年間の造寺造仏事業」(『愛知県立大学文学部論集 日本文化学科編』五六)二〇〇七年。同『平安京と中世仏教』(前掲論考注26)。
- 37 前掲西川新次「藤原彫刻」(注4)。武笠朗「院政期宮廷貴顕の美意識と仏像観」(『平等院と定朝』(『日本美術全集』六)所収)講談社、一九九四年二月。森由紀恵「平安末期における造仏と仏師」(『寧楽史苑』四一)一九九六年。
- 38 同年二月二十四日、三条殿寝殿南庇にて造始された女院(御産?)御祈御仏、長円父子と賢円作の三尺七仏薬師、尊勝、孔雀経明王、半丈六愛染

王、同身五体尊等（『長秋記』）をこれに当てる説があるが、これには円勢は関わっていない。根拠が不明である。小林剛「仏師法印賢円」（『大和文華』二二）一九五六年、『日本彫刻作家研究』所収、有隣堂、一九七八年五月。

39 『増補史料大成』本による。ただ尊像名で「尊」を用いる例は『永昌記』には認められない。

40 堀河帝崩御の時の円勢作丈六五大尊や、待賢門院の場合、顕仁、君仁の時、このあと閏七月二十日の本仁の時にも丈六御仏数体が仏師数百人によつて造り始められている（『中右記』）。

41 『永昌記』には丈六弥陀、三尺観音勢至地藏龍樹とある。法量は不審だが、尊名はこれに従うべきか。

42 『長秋記』は「円勢法印、（仏師）、堂供養、導師仁和寺僧都」としており、これを以て円勢がこの塔を造進したとする説があるが、「堂供養」（「塔供養」とすべきか）は次の導師に係るとみるべきで、円勢の造進とするのは誤りであろう。浅香年木『日本古代手工業史の研究』法政大学出版社、一九七一年。

43 ただ、ほぼ同時期に北斗曼荼羅造像が二具というのはいささか不審である。あるいはこの白河院の造像を忠実が請け負った可能性もないではない。白河上皇御願でかつ法勝寺となれば、それを作るのは円勢をおいて他になかるう。

44 小林剛「仏師系譜の訂正」（『佛教藝術』一六）一九五〇年二月、『日本彫刻作家研究』（前掲注38）所収。

45 最勝寺造像の仏師については長円についての次稿で論ずることになろう。

46 「次」は、その文脈から接続詞の「次に」ではないようで、大仏師に次ぐ仏師の呼称とみられる。本稿注16参照。

47 前掲伊東論考（注10）。

【仏師円勢事績年譜】

承暦元年 一〇七七 八月十三日、「法眼長勢二男」の「仏師□」、源俊房の二尺薬師を造始。（『水左記』）※円勢か。

永保三年 一〇八三 十月一日、法勝寺八角九重塔供養。長勢より造仏賞を譲られて法橋に叙される。（『三僧記類聚』所収「法勝寺金堂御仏」）

（寛治五年 一〇九一 十一月九日、長勢没。）

（寛治七年 一〇九三 六月二十七日、白河上皇法勝寺薬師堂にて丈六六観音像供養。（『扶桑略記』『後二条師通記』等）※これが康和四年供養の尊勝寺観音堂に安置されるという。※円勢か。）

寛治七年 一〇九三 七月二十七日供養の堀河帝の等身五大尊造立。（『中右記』）

寛治八年 一〇九四 七月二十六日、院御仏百体（等身観音百体）を円勢の許より法勝寺に送る。（『中右記』）

承德二年 一〇九八 十月二十日供養堀河帝御願祇園御塔（多宝塔）の五仏造立。（『中右記』）

（康和三年 一一〇一 三月十二日、内裏にて尊勝寺曼荼羅堂御仏供養。（『修

法要抄』所引『時範記』、『中右記』）※円勢か）

康和三年 一一〇一 三月二十九日供養白河上皇御願鳥羽証金剛院の丈六阿弥陀仏造立。法眼に叙される。（『殿暦』）

康和四年 一一〇二 七月二十一日供養堀河帝御願尊勝寺の造仏に従事し、法印に叙される。金堂・講堂・薬師堂・五大堂の御仏。造始は同二年（一一〇〇）七月二十五日（『殿暦』）。（『中右記』『康和四年尊勝寺供養記』）

康和五年 一一〇三 三月十一日、この日高野山大塔五仏御衣木加持。円勢手斧始という。（『高野春秋』『高野興廃記』）

康和五年 一一〇三 四月一日～五月四日、仁和寺北院薬師堂本尊白檀薬師如来坐像（現存）造立。（『三僧記類聚』）

康和五年 一一〇三 七月五日、尊勝寺阿弥陀堂御仏造始。（『本朝世紀』）

※長治二年（一一〇五）十二月十九日供養。円勢の譲りで長円法橋となる（『中右記』）。

長治二年 一一〇五 三月三十日、堀河帝病氣平癒御仏数体、院御所にて造始。（『中右記』）

嘉承二年 一一〇七 七月九日、白河上皇御願堀河帝病氣平癒のための丈六五天尊造始。（『為房卿記』）※同年七月十九日堀河帝崩御。

嘉承三年 一一〇八 六月二十三日、（藤原忠実？）北斗曼荼羅造始。（『中右記』）

（天仁元年 一一〇八 十二月十二日、院助没）
永久元年 一一一三 閏三月二十日、興福寺大衆入浴して清水寺別当円勢補

任のことを訴える。翌日円勢の別当を罷免する。（『永久元年記』）
永久二年 一一一四 六月三十日、「円勢弟子法師」七条辺りでの殺人事件

に関与するも免ぜられる。（『中右記』）
永久二年 一一一四 七月二十一日供養の院の阿弥陀木像造立。（『中右記』）

永久二年 一一一四 八月二日、法成寺講堂にて供養の藤原忠実発願丈六大成徳像造立。（『中右記』）

永久二年 一一一四 十一月二十九日供養の白河上皇発願白河泉殿九体阿弥陀堂の九体丈六阿弥陀像造立。長円・賢円を従えて。賢円に賞を譲り法橋

となす。（『為房卿記』『白河御堂供養記』）※後に蓮華藏院の院号。

永久六年 一一一八 三月八日、白河法皇御所にて教体の御仏造始。（『中右記』）
元永元年 一一一八 十月二十四日、法勝寺五大堂にて供養の、中宮璋子御

祈丈六不動像造立。（『殿曆』）
元永二年 一一一九 五月二十八日、院寝殿南庭にて璋子御産のための丈六

仏（不動と六字明王）造始。（『御産部類記』所引『源礼記』『礼部記』）
元永二年 一一一九 六月七日、若宮（鳥羽帝皇子顕仁）御料三尺御仏十体

造始。（『長秋記』『中右記』）
天治二年 一一二五 三月十八日？、法印円勢、女院御祈御仏（丈六不動尊

一休）供養のための仏具を造進する。（『法印円勢仏供養具目録』『東寺文書百合外』）三月十八日東寺にて供養の御産御祈丈六仏八体の内か。造像も円勢か。

天治二年 一一二五 五月二十四日、中宮璋子御産に先立ち、院御所三条鳥丸第にて丈六尊勝仏三体造始。円勢、「弟子両法橋」を率いてこれに当たる。（『御産部類記』所引『中右記』『永昌記』）

大治四年 一一二九 七月六日、二条御所にて白河上皇息災御祈の仏・小塔等を院に造進する。（『永昌記』）

（大治四年 一一二九 七月七日、白河上皇崩御。）
大治四年 一一二九 七月十日、円勢・長円・賢円等の作るところの女院御

祈仏を長円弟子の許に運び渡すべしとの仰せあり。この三人は本院御仏を造るためという。（『長秋記』）

大治四年 一一二九 閏七月二十日の故白河上皇御法事にて供養された女院御願半丈六木像阿弥陀五仏（丈六弥陀、三尺観音勢至地藏龍樹）を造立。

長円・賢円とともに。（『中右記』）
大治四年 一一二九 八月二十八日、院西対にて阿弥陀三尊造始。（『長秋記』）

大治五年 一一三〇 六月二十四日、白河上皇一周忌にあたり鳥羽上皇により建立された白河新阿弥陀堂中御塔（三重塔）供養。仏は円勢の造立か。

（『長秋記』）
大治五年 一一三〇 七月二日、白河上皇一周忌に際して鳥羽上皇建立の白

河九体新阿弥陀堂供養。円勢の譲りで賢円法眼となる。（彰考館本『僧綱補任』『長秋記』）※後に蓮華藏院の院号。塔と御堂は一連の造営。両方を

二人で造像したとみるべきか。
長承三年 一一三四 閏十二月二十一日、法印円勢没。（『僧綱補任』）

